採血待ち時間短縮に向けた採血室のレイアウトの工夫とデータ解析の取り組み

◎佐藤 多佳子[1)]、大西 幸栄[2)]
秋田赤十字病院[1)]、仙台市立病院[2)]

【はじめに】当院外来採血室では1日約200人の採血をおこなっているが,混雑時には採血待ち人数が30人を超え,1時間程度の待ち時間が発生していた。今回我々は,経年劣化した採血管準備装置の更新を機に,混雑時の待ち時間の緩和を図るための採血室のレイアウトの工夫をし,採血受付から採血実施までの時間等のデータ解析をおこなったので報告する。【採血管準備装置の更新と採血業務支援並びに指標化システムの導入】平成30年2月より採血管準備装置をi.pres core（小林クリエイト株式会社）に更新し,採血業務支援システムRInCS（同社）を導入した。また,平成31年2月より採血業務指標化システム（以下指標化システム）の稼働を開始した【方法】従来採血台は5台でおこなっていたが,採血受付のレイアウトを大きく変更し,採血台を6台にし,患者や採血者の動線を考えたレイアウトに変更した。また,データ解析については更新機器に搭載されているシステムを利用し,採血までの待ち時間,移動時間,採血時間などの所要時間のほか,曜日別,時間帯別などの集計をおこなったほか,指標化システムでは患者と採血者のレベル分けをするためのデータ蓄積を開始した。【結果】採血台を5台から6台に増設したが,目に見える混雑緩和には至らなかった。レイアウトの変更により従来車いす患者の採血場所が限られていたが,どの台でも採血可能となった。データ解析については以前のシステムに詳細情報がなく,比較することができなかったが,指標化システムの導入により,採血時の刺し直し率が平成31年2月では8.1%であったのに対し同年4月には5.5%に,採血者交代率は7.9%から5.3%と次第に低下していた。また採血時間においても240.9秒から227.2秒へと短縮していた。【考察】採血管準備装置の更新に伴った採血室のレイアウトの工夫により,採血台を5台から6台に増設することができたが,根本的な混雑緩和に至らなかったのは,採血患者の増加が考えられた。しかし,指標化システムの導入により,採血時の刺し直し率や採血者交代率を数字で見ることができた。現在もなおもデータを蓄積し,採血者の教育も含めてこの指標化システムを活用していきたいと考えている。

連絡先 018-829-5000（内線5600）